

角塚

——大野原町中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告——

1995.3

大野原町教育委員会

例　　言

1. 本書は、公園造成工事に先立ち平成5年度に実施した、香川県三豊郡大野原町所在の角塚の確認調査の概要報告書である。
2. 調査は大野原町教育委員会が主体となり、香川県教育委員会がそれを指導した。
3. 調査は香川県教育委員会事務局文化行政課主任技師森下英治が指導、担当した。
4. 本書の挿図中のレベル高はすべて海拔を表す。
5. 挿図の一部に、建設省国土地理院発行の25,000分の1 地形図（観音寺・豊浜）を使用した。
6. 本文の執筆、編集は森下が担当した。

1. はじめに

角塚は、香川県三豊郡大野原町大字大野原に所在する終末期古墳であり、県指定史跡、平塚、角塚、楕円墳（大野原古墳群）を構成する古墳の一つである。今回、角塚と平塚の間に建設された中央公園の造成に先立ち、角塚の試掘調査および測量調査を実施した。本書の刊行は、その調査の結果を広く一般に公開し、三豊平野の古代文化を語る上で重要な古墳の基礎資料として、今後の調査研究に役立てようとするものである。

(1) 調査に至る経緯と調査の経過

角塚の周辺は近年高速道路が整備されるにあたりインターチェンジが建設され、その便を活かした公共資本の整備や、民間投資が盛んに行われつつある。

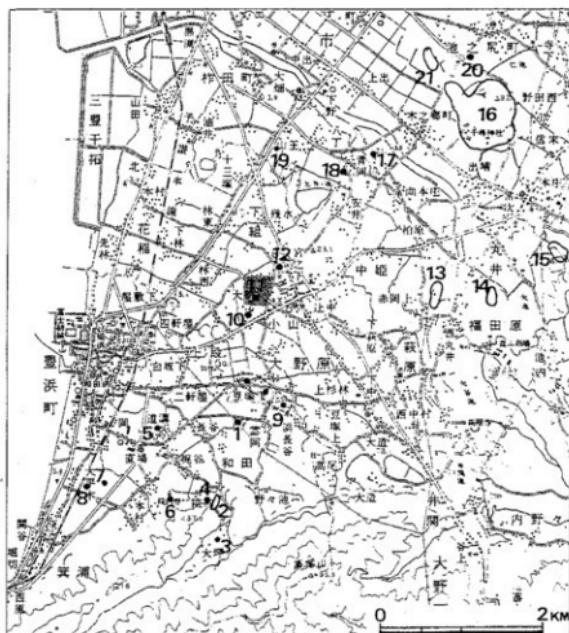
大野原古墳群は、北から楕円墳、角塚、平塚とそれぞれ約200mの間隔をもって分布し、付近は町役場や公民館など公共施設が立ち並ぶ町政・文化の中心地であり、その中にあって今に残るいにしえのモニュメントとして、その偉容を留めた県内随一の後期巨石墳群である。

今回、町の文化振興を託した「中央公園」の造成に伴い、事業予定地に隣接する県史跡「角塚」の範囲を確認し、適切な保存を図る目的で、試掘調査を実施した。また墳丘形状等の確認のため、墳丘測量調査も併せて行った。

試掘調査は平成5年7月28日から同年8月5日までの間で実施し、併せて実施した測量調査で不十分な箇所について平成6年3月31日までの期間で適宜補足した。また、試掘調査の結果、一部角塚の周濠の検出が予想される工事箇所について平成5年11月18日に立会調査を行った。以上の調査は県教育委員会の指導のもと町教育委員会が主体となって実施した。

調査にあたり以下の方々のご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

片桐 孝浩 森 格也 石井 健一 國木 健司（敬称略）



第1図 周辺の遺跡地図

(2) 角塚の立地と環境

大野原町は香川県西部の三豊平野に位置する。瀬戸内海の燧灘に面する南北に細長い海浜をひかえ、その背後に大規模な平野が展開している。平野を流れる主要河川は財田川、祚田川があり、なかでも財田川がもっとも規模が大きく、その沖積地には觀音寺市が所在し、現在、三豊地方の行政・経済・文化において中心的役割を果たしている。平野の南西側は愛媛県川之江市に接続し、本県で最も西端の豊浜町が県境に接している。大野原町は南で豊浜町と、北で觀音寺市と町界を接し、祚田川の南岸平野の大部分を占めている。

平野部の微地形は埋没途上の段丘面が各所で見られ、これは南東の山丘から北に向かって延びる幾筋かの丘陵がかなり低地部まで到達しており、それらを繋う形で小河川が開削した結果形成されたものとみられる。

周辺の遺跡でもっとも古い時期のものは、豊浜町院内貝塚で縄文時代前期の所産である。三豊平野においては南草木遺跡・小萬島遺跡・船越遺跡など莊内半島周辺の海浜立地の遺跡がよく知られるが、平野南半の縄文時代の遺跡はあまり知られておらず、院内貝塚が内陸部に立地することから、その相違が興味深い。

弥生時代の遺跡は中姫遺跡で前期土器が、久染遺跡で後期土器が出土している。青銅器関係では、觀音寺市藤の谷遺跡で細形銅劍の出土が、また財田町吉田古墳群周辺で平形銅劍が採集されている。

三豊平野の前期古墳には前方後円墳が認められない。古式前方後円墳が数多く分布する謹岐にあって、三豊地方はその時流から離反した状態にあった。前方後円墳の出現は觀音寺市丸山古墳（5世紀前半）、同市青塚古墳（5世紀中葉）であり、両者とも阿蘇系凝灰岩を使用した舟形石棺を埋葬主体とする。その後6世紀前葉まで小首長墓として大野原町赤瀬山古墳、豊中町王塚古墳などの大形円墳が築造され、前方後円墳の系譜は後の群集墳である母神山古墳群の盟主墳のひさご塚古墳（6世紀前半）に引き継がれてその後に前方後円墳はみられない。豊中町台山古墳は円筒埴輪を保有する方墳で、系譜的には不明な点が多い。横穴式石室の導入は6世紀中葉段階で、この時期母神山古墳群の初期の一群が形成されはじめるとの数は少なく、6世紀後葉段階にいたって10基程度の群集墳が各所で出現する。これらは7世紀前葉で新たな造墓が停止し、追葬が7世紀中葉～後半までみられる。7世紀中葉以降の造墓は祚田川以南の地域にいまのところ限定されており、角塚はまさにそのグループの頭目といえる。

ところで豊中町延命古墳は6世紀後半の大形横穴式石室をもつ円墳で、石室形態は当該地域に特徴的な玄門立柱を持たない畿内の様式である。この一つ北側の丘陵に高句麗様式の軒丸瓦を出土する妙音寺が所在する。当寺は県内でもっとも古い時期の創建が想定されており、いち早く畿内の先進文化を取り入れた意味から延命古墳との関係が注目される。

三豊平野の古代寺院はこのほかに觀音寺市高屋庵寺、大野原町安井庵寺、山本町大興寺跡があり、いずれも木葉形・素弁で裏面に布目をもつ軒丸瓦を出土しており、妙音寺に端を発する高句麗様式の脈略を保持する点で興味深い。

2. 調査概要

(1) 試掘調査

調査方法とトレンチの設定

調査着手時にはすでに古墳の周辺の水田は用地買収が終了し、造成土が20cmほど盛り上げてあった。墳丘周辺の旧地形を推定することは困難であったが、造成前の平面図や写真等から判断して南方約200mに位置する平塚との間には顯著な窪地ではなく、また阿讃山脈を望む南東方向にも丘陵が接している状況ではなかったことが推定された。このことから平坦な地形上に周濠の掘削土で大規模な盛土をまかなったことが想定された。したがってかなり深い周濠に対応できるよう試掘トレンチの掘削は比較的大型の重機を使用した。

大野原古墳群の周辺には幾つかの性格不明の塚が分布する。これらは過去に削平を受けてわずかにその痕跡をとどめる程度のものが多く、すでに消失したものもある。公園造成に伴い、構造物が予定される箇所については、その箇所の地下構造の有無を確認することも併せて行った。

設定したトレンチは合計6箇所で、調査面積は264m²である。1～4トレンチは角塚周濠の検出を目的として墳丘の西側と南側に図のとおり設定した。東側は事業対象地外であり墓地として機能していることから、現段階で確認する必要はないものと判断された。北側は土地利用の都合上トレンチの設定が不可能であり、必要となった段階で、立会調査で確認することとした。5,6トレンチは屋外ステージの建設予定地における地下遺構の確認のために設定したものである。

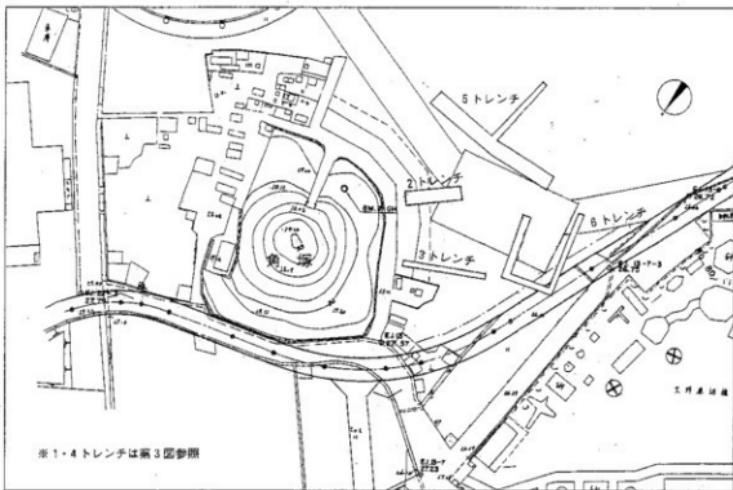
1 トレンチ

墳丘南側の表道前面からやや西に寄った位置に設定した。造成土上から30～50cmで旧水田面を検出。さらにそこから40cm下位で灰褐色礫層を検出した。礫層は1cm程度の小礫を主体として10～30cmの大形円礫が混じる。層中に遺物は含まれず、周辺の肩状地形成に起因する堆積層と推定された。その上面では周濠の掘り形は検出できず、さらに1mほど掘削して断面観察を行った。その結果トレンチ北端から4.5mの地点から非常に不明瞭であるが暗灰褐色砂礫層の落ちが認められた。埋土中には近代以降の遺物が含まれており、掘削当初は疑惑が残ったが、他のトレンチの状況から考えて、周濠が近代まで遺存していたものと推定し古墳の周濠と判断したものである。周濠の深さは1.7mをはかる。

なお、周濠の60cm南側に幅1.5mの溝が存在したが所属時期、性格等は不明である。

2 トレンチ

周濠の南西隅からやや北に設定した。造成土から70cmで、2トレンチと同様の礫層が確認された。トレンチ東端から5mの地点より周濠の落ちが確認できた。埋土の上層は1トレンチと同じ砂礫層が堆積し近代遺物を含むが、その下位に約50cmほどの厚さの黒色砂質土が堆積しており、ベースの礫層とは容易に区別がつくものであった。この黒色土層は周濠遺存段階の漸次堆積層と推定される。周濠の深さは1.7mである。



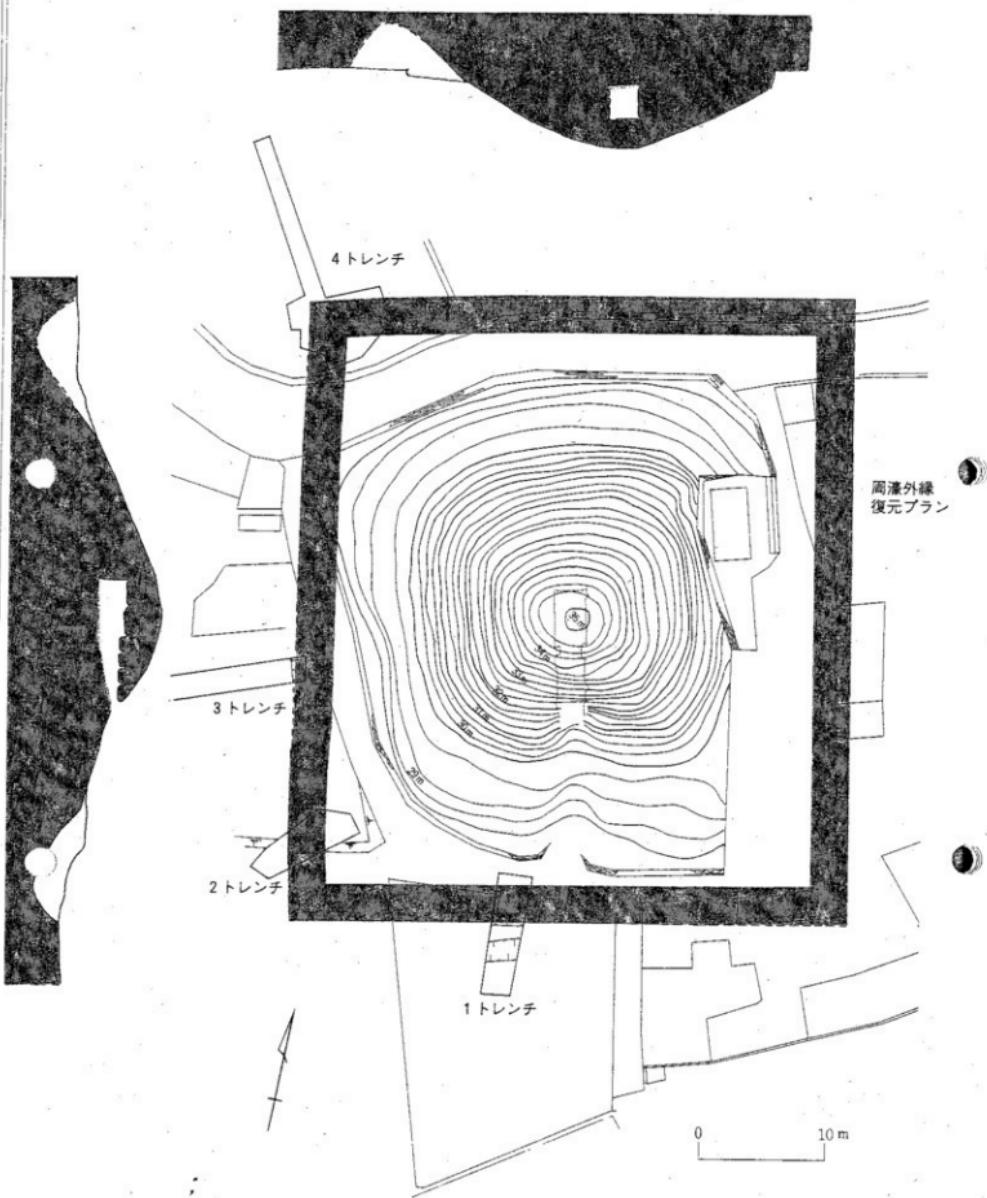
第2図 角塚周辺トレンチ配置図 (1/1,000)

3 トレンチ

墳丘西側中央部に設定した。墳丘の間際で黒色土層のわずかな落ち込みを検出したに過ぎない。周濠の大部分は県史跡指定地内に含まれるものと思われた。

4 トレンチ

周濠北西溝にあたる位置に設定した。厚さ60cmの造成土を除去し、さらに厚さ20cmの耕作土を除去した



第3図 角塙墳丘測量図 (1/400)

段階で黄色裸混じりシルト層をベースとして直角に屈曲する周濠の平面プランを検出した。一部を掘開して断面観察を行った。埋土は大きく3層に分かれ、上層は10cm大の円礫が140cmの厚さで確認された。これは自然堆積とは考えにくく、意図的に埋めたものである可能性が高い。出土遺物はないが1~3トレンチの状況から推定して、近代ごろの耕地開発にあたり周濠が埋められた可能性が高い。中層は2トレンチ下層で確認した黒色砂質土が厚さ40cmで同様に堆積しており、周濠存続時の堆積土と推定される。下層の灰褐色裸混じりシルト層には地山ブロックが混入しており、周濠掘削後初期の流入土と推定された。この層位から須恵器の提瓶の小破片が出土している。トレンチ南端で周濠の下端をわずかではあるが検出しており、その箇所における周濠の深さは2.3mをはかる。

5 トレンチ

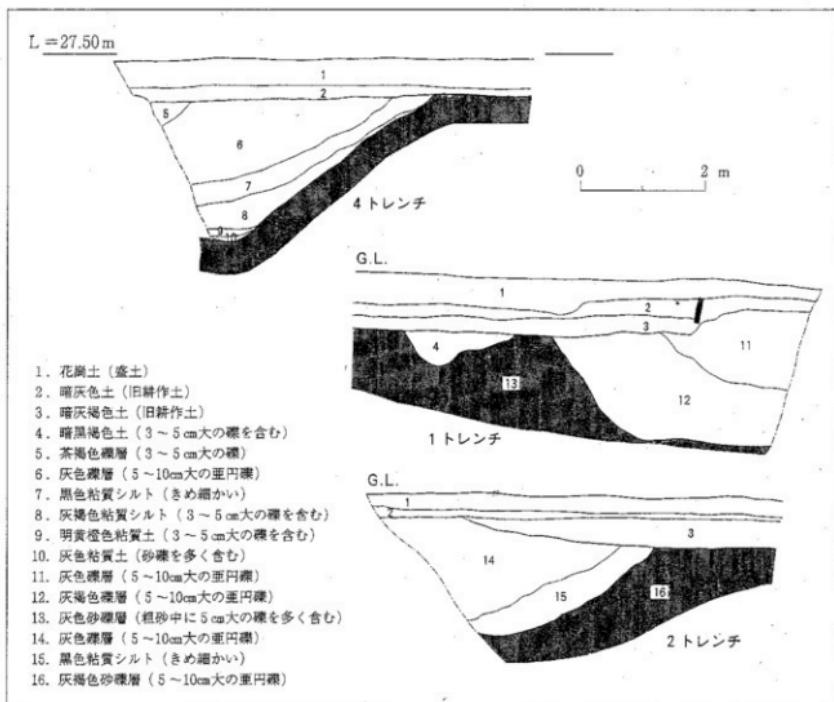
角塀の南西約10m離れた位置にT字状に掘削した。造成土や耕作土を除去し、基盤層を検出したが、遺構は所在しなかった。

6 トレンチ

角塀の西側約25m離れた位置にコ字状に掘削した。造成土や耕作土を除去し、基盤層を検出したが、遺構は所在しなかった。

(2) 工事立会調査

角塀の北側に走る町道の水路工事の際に、周濠の北西隅の位置確認を目的として工事立会調査を実施した。しかし、一部で周濠の平面プランを検出したものの、コーナー部分は検出することはできなかった。



第4図 トレンチ断面実測図

(3) 墳丘測量調査

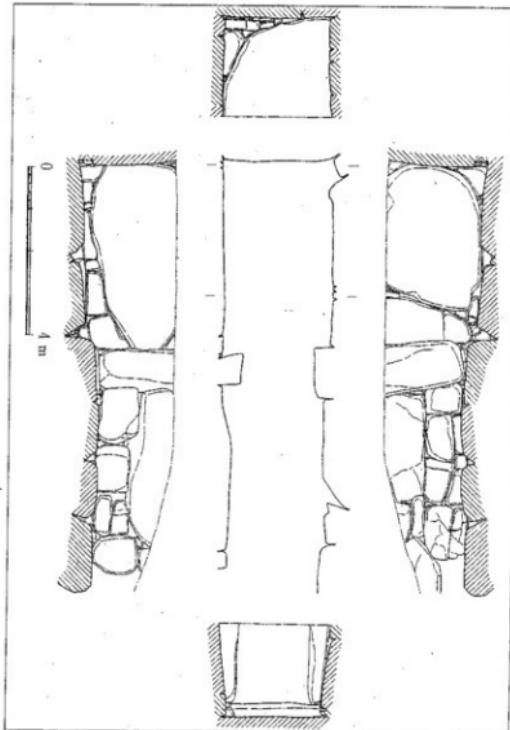
角塚は從来から方墳であることは知られていたが、墳丘測量図がなく正確な規模等が不明であった。今回の測量調査は試掘調査で検出した周濠について、墳丘との関係を把握した上でその適切な保護を図る必要があることから、県指定史跡内の墳丘を含めて測量調査を実施したものである。

測量の結果、周辺地盤と墳頂部との比高差は約8mで標高30m以上については若干南北方向に長い長方形形状を留め、段を持たない四角錐の立面プランをもつことが判明した。石室との関係では、墳頂部が概ね玄室中心点に一致し、開口方向は墳丘中軸線にのる。試掘調査で確認した周濠下端から測ると墳丘の高さは10.3mに復元できる。また、石室の床面は周濠下端から約5mを測る位置にあり、墳丘高さの約半分に設定されているものと推定された。

これによって、試掘調査が実施できなかつた墳丘東側の状況についても石室および墳丘の主軸を中心線として折り返せば、復元可能な資料が整つたものと言える。

(4) まとめ

以上をまとめると、墳丘測量で確認した長方形の長辺の主軸は、周濠のラインに並行しており、1~3トレンチで確認した不確実な立ち上がりが、角塚の周濠に伴うものであることを改めて確認するとともに、長辺は約54mであることがあきらかとなった。また、石室の主軸は墳丘の主軸には重複しており、墳丘の短辺側の中心に位置することは容易に想像でき、妥当性が高いことから、古墳の短辺側の規模は、周濠の外縁を図って、約45mと復元できる。



第5図 角塚の横穴式石室（香川考古創刊号より）

3. 結語

今回の調査は県指定史跡の角塚外接地にトレーンチを設定し、周濠を確認した過ぎないが、本体の墳丘の測量調査結果とあわせて、基礎的データが収集された意義は大きい。以下では今回把握したデータを加えた角塚の考古学的意義について若干のまとめを行う。

墳丘とその規模について

角塚の墳丘はかねてより指摘されていたとおり、方墳であることが明かとなった。その規模は周濠の外端からはあって54m×45mと大形であり、墳丘部のみでも45m×36m程度は十分想定できるものである。これは7世紀以降畿内中枢で築造された同時期の大王墓クラスの大形方墳に匹敵する規模であることは注目できる。なお、測量の結果墳丘に段築は認められず、単純な方錐状を呈していたことが明かとなった。また、平面形が正方形ではなく幾分長方形であることが特徴として指摘できた。

石室について

角塚の横穴式石室は大形石材を使用した両袖式石室で、玄室の長さ4.3m、幅2.5m、羨道幅2.2mで現存する長さは10.1mをはかる。玄室の奥壁および右側壁に1枚石を使用し、左側壁においても2枚石で構成されている。石材の表面平滑化が進んでおり、切石積み石室を模索した様子が窺える。

西日本の横穴式石室を編年・集成した山崎信二氏は大野原古墳群および母神山鐘子塚古墳について次のように考えている。¹³⁾

角塚を含む大野原古墳群の編年は、石室構造の変遷から輪貸塚→平塚→角塚の順で推移する。各古墳の石室構造は輪貸塚が玄室・前室・羨道を門柱および天井石の架構等から明瞭に区分された複室構造で、6世紀後半の北部九州の石室に酷似し、母神山古墳群の盟主墳である鐘子塚古墳と相前後する時期の所産と推定する。

これに後続する平塚は、玄門部構造で輪貸塚との共通性がみられるが、前室が省略されており、複室構造の石室が簡略化されて單室構造へ変化したものと考える。

角塚では大形の切石が使用され、内側に張り出す玄門立柱は引き続き見られるが、それを覆う天井石の高さは羨道部と同じレベルとなっており、畿内型石室の影響を受けたものと考える。

山崎氏は瀬戸内海沿岸各地で角塚同様な形態の石室が生成されていることから、その典型例である角塚をもって角塚型石室とし、それが生成されるプロセスが地方豪族と中央有力豪族との同族関係が強化される過程と把握する。ただし、角塚型石室が玄門立柱を依然保持し、前段からの形態変化を追うことが可能であることから、吉備以東の石室の急激な畿内型化と対比して、讃岐以西の諸地域についてはヤマト政権との一元的な従属関係におかれず、九州との関連を強く有して、なお相対的自立性を有していたとみる。なお各地の角塚型石室は30~40年の年代差があるとして、広島県梅木平古墳・愛媛県宝洞山1号墳が飛鳥Ⅰ期末~Ⅱ期(7世紀前葉)、山口県防府市岩島1号墳が飛鳥Ⅱ期(7世紀前半)、角塚・愛媛県川之江市向山1号墳が飛鳥Ⅱ期~Ⅲ期(7世紀中葉)、広島県大坊古墳が飛鳥Ⅲ期(7世紀中葉新相)と編年している。

今回、角塚の周濠より出土した須恵器片は外面にカキ目があり、提瓶あるいは平瓶の小破片と推定され、この年代観とは矛盾しない。

角塚の特徴

角塚は当該地域における最後の巨石墳である。7世紀中葉ごろに地方豪族の大形墳が終焉を迎えることについて、県内諸地域と同一歩調である。角塚の特異性はそれ以前の系譜が円墳であったのに対し、墳丘が方墳に変質する点があげられる。その規模からみても終末段階の古墳の規模としては大きい。

ところで、角塚とはほほ同じ時期に築造された奈良県桜井市艸墓古墳は側壁が一枚石である点で角塚と類似する。また玄室の長さ・幅・高さがほほ同じであることも注目される。今回角塚を測量した結果、墳丘の形態についても類似する点が見いだされた。すなわち、平面形が長方形形状を呈し角塚が長辺:短辺が54m:45m(1.20:1)で艸墓が28m:22m(1.27:1)で近似した数値を示す。また、墳丘に段築をもたず方錐形

であることも類似している。築造にあたり両古墳で共通した技術基盤を保有していた可能性もあり、今後注目される。

角塚周辺の方墳

角塚周辺では7世紀代の方墳が散見される。6世紀代の群集墳で方墳を採用するものはこれまで知られていないことから、角塚の墳形に規制されたものである可能性が高い。

雲岡古墳¹⁴は陶邑編年IV型式1段階の須恵器が礫床下から出土しており、7世紀末葉の築造年代が推定されている。石室形態は無袖式であり、また石室規模の縮小化が著しく羨道部の埋葬もあること、さらに基底石に大形の平石を立てて使用することなど終末期古墳の諸要素を備えている。墳丘は長辺12.7m短辺11.2m(1.13:1)の長方形状である。

埴穴塚古墳¹⁵は大野原町の花畠に所在する。石室は遺存状況が悪く、石材としては玄門部の敷居石と玄室の礫床が少量検出されたのみである。しかし、石材の抜き取り穴から規模が推定でき、長さ3.8m、幅1.4mで無袖か左片袖であった可能性が高い。墳丘は削平を受けており周濠のみの検出であったが、周濠の内側の下端を墳丘基底部と仮定すると長辺14.5m、短辺12.0m(1.21:1)の長方形状となり、玄室の中心と墳丘の中心点がほぼ一致する。墳丘の縦横比も含め、角塚との共通性が指摘される。出土の須恵器は、壺蓋は直径10cm程度の小型化が進んだもので、内面に比較的長いかいえりが認められ、天井部外側中央には断面菱形の宝珠様つまみが付されている。壺身は底部が比較的平らで、口縁部がやや外反気味にのびており、底部外縁に一条の沈線をめぐらせるものが多い。鉢は直径30cmをはかる大形のもので、内面に短いかいえりがみられる。

以上の特徴は陶邑編年III型式1段階ないし2段階の特徴に共通するが、壺身口縁部の外反傾向がより新しい要素と把握できることから、2段階に下る資料と考えられる。有蓋高杯や提瓶が存在するなど、II型式の器種を留めていることは、壺身底部の沈線等にみる三豈地方の須恵器の特徴として解釈できるものである。このように埴穴塚古墳の所属時期は7世紀中葉ごろと推定することができる。

このほか終末期古墳の可能性があるものとして、豆塚1号墳があげられる。未調査の古墳であるが、現況では一辺10mあまりの方墳と推定される。

7世紀中葉以降は各地で古墳が作られなくなるが、7世紀中葉段階で当地域に大規模な方墳が築造され、その周辺に小規模な方墳が分布するのは興味深い。

まとめ

角塚が所在する大野原町は、古代の刈田郡姫江郷に属していた。郡には有力豪族刈田氏が居住していたものと思われ、日本三代実録には貞觀9年(867)に紀朝臣の姓を受けられた刈田首安雄が登場する。郡内には紀伊郷・坂本郷など紀氏と関わりの深い郷名があり、7世紀初頭墳に大和朝廷の半島政略に活躍した紀氏と角塚の被葬者を頭目とする刈田郡の豪族との関係は、今後十分に検討する必要がある。



第8図 雲岡古墳出土の須恵器(1)